



～カムパネルラとは～  
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol. 5 2008年7月号

- 多様な表現へと誘ってくれる絵本・・・田端 健人
- 太鼓を叩く・・・藤田 博
- *The Enormous Turnip*・・・齋藤 友靖
- 大切なことを教えてくれるこの一冊・・・千葉 汐未
- 新刊紹介・・・藤田 博

## ■ 多様な表現へと誘ってくれる絵本

田端 健人

このタイトルを聞くと、物語を思い出すよりも、林光さん作曲の同名の合唱曲が響いてくる、という方もいらっしゃるでしょう。実際私も、この絵本を読んだのは、合唱曲を知ったずっと後でした。幼年時代、「もりはいきている～♪」と口ずさみ、続けて、「こおりにとざされた～♪まつゆきそうだっっていきて～い～る～♪」、と音痴なりに歌いながら、どうして「まつゆきそう」なのか、首をかしげたものです。

この物語が書かれたのは 1943 年、今では小学館『世界の名作』全 18 巻にも収められていますから、「古典的」名作と呼ぶにふさわしい作品です。ところが、この物語も合唱曲も知らないという幼稚園や小学校の先生方に 何人もお会いし、時代の変化に驚いたことがありました。ちなみに、私が担当している講義「子ども学」で 250 名ほどの学生に尋ねたところ、このお話を知っていたのは、わずか 20 名弱でした。

もう60年以上も昔の作品ですが、環境破壊や地球温暖化が7月の洞爺湖サミットで主要議題とされる今日、タイトルが象徴するように、この童話は、きわめて現代的な問題に関わっています。実はこのタイトル、最初の邦訳者、湯浅芳子さんが付けたものなのです。原題は、「12月(Dvenatzatchi meshatzev)」なのだそうですが、これを直訳すると魅力がなくなってしまうので、改題したのだそうです。60年後に新たな輝きを発する見事な改題です。なお、タイトルの「12月」は、「12がつ」ではなく、「12つき」と読みます。これは、それぞれの月の自然気候を司る12人の「月の精」にまつわるお話だからです。例えば、老齢な1月の精は、「わしがいないと、1月らしい きびしい さむさにもならず、風も ふかす、雪も ふらないのだ」、と語ります。地球温暖化は、1月の精霊がどこかに去ってしまったせいなのかもしれません。

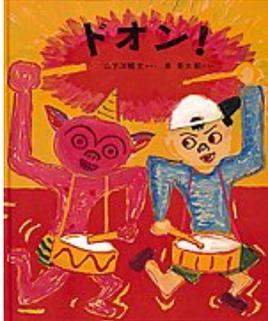
この絵本には、表題の版の他にも、いくつものヴァリエーションがあります。お話を短く読み聞かせたいなら、『12の月たち—スラブ民話—』(評論社)がおすすめです。小学校高学年には、湯浅さんが訳された『森は生きている』(岩波少年文庫)がよいでしょう。他にも、小学館版の絵本もあり、訳や挿絵の違いも楽しめます。あえて表題の版を選んだのは、この版だけ、林光さんの幾つもの合唱曲が楽譜付で掲載されているからです。加えて、この版には、「斎藤公子の保育絵本」とシリーズ名が記されています。斎藤先生は、さくら・さくらんぼ保育園を創設した卓越した保育者ですが、この版には、その園児たちが描いた絵も、掲載されています。この場面ですべてこの構図に、この彩色になるのだろうか？、と子どもたちが住み込んだお話の世界に思いを寄せるのも、楽しいひと時です。幼稚園や小学校で、物語の世界に浸りながら、みんなで合唱してみるもよし、心に残った場面を絵にしてみるのも、演劇やオペレッタとして演じてみるのもいいでしょう。この絵本はとりわけ、子どもたちと先生方を、多様な表現へと誘ってくれる魅力に充ちているのです。



※「森は生きている—12月のものがたり—」 マルシャーク作／エリョーミナ絵／青木書店

(学校教育講座)

何であっても叩けば音がします。誰であっても叩けば音を出すことができます。打楽器に共通するその性格は、とりわけ太鼓に言えることです。太鼓はシンプルです。それであって、あるいはそれだけに複雑です。太鼓を叩くのは何かの始まりを告げるため、イニシエーションと深く関わっています。儀礼に太鼓を欠かすことができないのはそのためです。太鼓が鳴る、それによって違った時間、違った世界が開けることになるのです。



山下洋輔・文／長 新太・絵『ドオン!』(福音館書店)では、いたずらもののオニの子ドンが追い出されます。こうちゃんも同じです。そのこうちゃんの上にドンが落ちてきます。けんかになった二人は、負けじと太鼓を打ち合います。こうちゃんの両親が、ドンの両親が加勢します。こうちゃんのねこといぬ、ドンのにわとりとうしが加わります。「とつぜん、みんなの たいこのおとが、『ドオン!』とあいました。」そこに広がるのは哄笑の世界。角突き合いをしていた心が一つになったのです。

「繰り返し」は絵本にとってなくてはならないもの、そうだとすれば、太鼓の音が大切な役割を担うことになるのは当然です。マギー・ダフ再話、ホセ・アルエゴ、アリアンヌ・ドゥイ絵『ランパンパン』(評論社)は、鳴き声がいいことを理由に、王に女房を連れていかれてしまったクロドリの話です。クロドリは王に戦いを挑みます。「さあ、王様とのたたかいだ。『ランパンパン、ランパンパン、ランパンパンパンパン』ランパンパン、ランパンパン、繰り返されるその音がいつまでも頭の中で鳴りつづけます。

「おんがくが だいすきな おくに」の人がいます。「たいこだの ふえだの アコーディオンだの もっきんだの すずだの」を「よくばりで いじきたなくて なまけもの」のアクマに取り上げられてしまいます。それならと、「むぎぶえやら あきかんの ピアノやら しょうゆだるや かなだらい」を楽器とします。それもアクマに取り上げられてしまいます。ならば「ことりや むしや せみや どうぶつを どっさり たくさん あつめ」ればいい。それもだめなら、歌を歌えばいい。その度に輪は大きく、強くなります。かこさとし『わっしょいわっしょいぶんぶん』(偕成社)で一人仲間外れになるのは、雲の上のアクマ、アウトサイダーとしてのアクマなのです。楽器を取り上げ、いじわるをする、それによって逆に皆が一つになる手助けをしてしまうアクマは、太鼓を叩けない、叩かない道化と言えるのです。



岸 武雄・文／梶山俊夫・絵『あほろくの川だいいこ』(ポプラ社)は、愚かであるが故に「あほろく」と名づけられた男の物語です。川を流されてきた男は、「ほとけさまが ねてござるようなやさしいかお」をしていました。異人(ストレンジャー)としての男に対する村人の態度は敵意(hostility)と歓待(hospitality)。庄屋の座敷へ運んだことにそれは見えています。しかし、目が見えない、記憶がないあほろくと名づけられたその男が、座敷から台所へ、更には物置へ移されるのはあつという間です。あほろくは村外れに住む「おとく」と暮らすことになり、おとくは遺言として、「ろくにもできるしごとをみつけて」くれるよう村人に頼みます。村人はあほろくに「川太鼓」を打たせることにします。一番太鼓、二番太鼓、三番太鼓と、村人が来てくれることを信じて、腰まで水につかりながらあほろくは必死に太鼓を打ちつづけるのです。濁流に飲み込まれたあほろくは下流へと流されていきます。あほろくは死んでしまったのでしょうか。下流の村で助けられ、庄屋の座敷へ運ばれ、・・・とすれば、川上から流れてきたあほろくは川上にある村でも川太鼓打ちをさせられていた、それがここに来てわかるのです。

大雨が降る度に、「ドーン、ドーン」という太鼓の音が響いてきます。ろくの怒りでしょうか、うらみでしょうか。「太鼓叩き」は道化の別名です。叩き役でありながら、叩かれ役も引き受けるのが道化としてのあほろくなのです。

※「ドオン!」山下洋輔・作／長 新太・絵／福音館書店

※「わっしょいわっしょいぶんぶんぶん」かこさとし・作／偕成社

※「あほろくの川だいいこ」岸 武雄・作／梶山俊夫・絵／ポプラ社

私が英語の授業で紹介した絵本は、*The Enormous Turnip*です。みなさんは、「おおきなかぶ」と言えば、もう内容はお分かりでしょう。「うんとこしょ、どっこいしょ、それでもかぶはぬけません。おじいさんは、おばあさんをよんできました。」です。

そう、ロシアの民話「おおきなかぶ」の英語版が *The Enormous Turnip* なのです。この英語版にはかぶが抜けた後に続きのお話があるのです。

一昨年、中学2年生の英語の授業でこの本を紹介しました。子どもたちはその頃ちょうど、“I think that～” “because～”などの言語材料を学習していました。授業の流れは、まず *The Enormous Turnip* を紹介します。次に生徒を車座に座らせて、ALTが絵本を見せながら範読します。生徒にとって未習の語句が使われますが、ALTがジェスチャーなどで補足するだけで生徒は内容を十分理解していたようです。次に、やっとかぶが抜けた場面で物語を読むのを一旦止めます。そこで、この絵本には続きがあることを伝え、どんなストーリーなのか予想をさせます。子どもたちは、「やっと抜けたかぶを食べるのかな。かぶの中から何か出てくるのかな。」と発想豊かに予想します。それを生徒と英語(単語レベル)でやりとりをします。その後、続きの話を読み聞かせます。最後に、絵本を読んだ感想を英文で書かせます。もちろん、どうしてそのように感じたかという理由も加えて。多くの生徒は、“I think that ~ because ~.”を用いて書いていました。また、発表の場面を設けることで、おもしろさの視点や感じ方の違いに気づかせることもできたと思います。



『おおきなかぶ』の絵本の一つでは、佐藤忠良氏が絵を描いています。宮城県美術館に佐藤忠良氏の作品が多く展示されていて、生徒にも身近であるという点、子どもたちの多くが小学1年生の時、国語の授業で学習していて、内容をおおまかに覚えているという点、読んだ後に感想を述べさせることで自分の感じたことを素直に英語で表すことができるという点、そして、“Then the old man pulled and the old woman pulled and the boy pulled and the girl pulled with all their might...”という英語の絵本独特のくり返しや音にも触れさせたいという思いから、*The Enormous Turnip* を教材として使用することにしました。

英語で書かれた絵本を読むのは、生徒にとって生の作品に触れることができるよい機会だと思います。車座になって絵本の世界に引きつけられる生徒の表情がそれらを物語っていました。絵本のストーリーも読み手、聞き手のとり方で感じ方は大きく違ってくると思います。その絵本に秘められた作者の思い、文化的な背景もあるでしょう。それでも、おじいさんやおばあさん、ひいては、ねこやいぬまでが手伝ってかぶを抜こうとする姿に、仲間の力は大きい、enormous な力なのだと感じることは変わらないと思いました。

Vera Southgate & Christine Owen, *The Enormous Turnip* (Ladybird Books)

※「おおきなかぶ」 A・トルストイ再話／内田莉莎子訳／佐藤忠良画／福音館書店

(附属中学校教諭)

## ■ 大切なことを教えてくれるこの一冊

浜田廣介・文／池田竜雄・絵『ないたあかおに』（偕成社）

千葉 汐未

この本は、私のお気に入りです。母によく読んでもらいました。鬼と聞いて思い浮かぶのは、怖い、乱暴、邪悪…、良いイメージはありません。ところが、この絵本に登場するあかおには、心優しい鬼なのです。

あかおには一つの願いがあります。人間と仲良くなることです。しかし、人間は「鬼」と聞いただけで恐れ、近づこうとしません。それを見かねた親友のあおおにが、あかおにのために一芝居打つ、村で暴れる憎まれ役を買って出るので。「悪い」あおおにを追い払うことによって、あかおには良い鬼であることを人間に認めてもらうことができました。あかおにの願いが叶ったのです。

人間と仲良くなり、楽しく暮らすなかで、あかおにはあおおにのことをふと思い出します。あおおにが気に入り、家を訪ねますが、そこで見たのは、永遠の友情を綴った置き手紙でした。あかおには、人間と友達になることができました。しかし、その代償として、最も近くにあった最も大切なものを失ってしまったのです。あおおにがどこか遠くへ行ってしまっただけで、無償の友情の存在に気づいたのです。

友情や愛は目には見えません。大切な人が近くにいればいるほど、愛や友情は当たり前になっていたり、一方的にもらうばかりになっていたりします。大切な人がいなくなって初めて、その大切さが見えてくるのです。何年かぶりにこの本を手に取りました。大切なものほど近くにあり、見えないものなのだというのを改めて考えさせられました。



(特別支援教育教員養成課程健康・運動障害教育コース2年)

## ■ 新刊紹介

五味太郎・作『もりにいちばができる』（玉川大学出版部）

自分が過剰に持っている、その自分にはないものがある、相手が過剰に持っている、その相手にはないものがある、そうした場合、過剰にあるものとないものを取り替えることを考えます。知恵のある人間の証です。かくして「物々交換」という名のコミュニケーションが始まることとなります。交換する相手が多くなれば、持ち寄る時間を決め、場所を決めることが必要になります。日曜日に、村の真ん中の広場でといったようです。市の始まりです。多くの市が十字路に開かれるのは、十字路が便利さを超えた象徴的意味を持っているからと言えます。そこにお金が登場し、介在する、それによって物々交換から何歩も前進した、市のいらぬ「市」へと向かうことは見えています。



おいしいぶどうをたくさんつけるぶどうの木があります。持ち主はきつねです。毎日、ぶどうを食べているきつねは、たぬきに一房やることにします。お返しに、たぬきがりんごを持ってきます。きつねは、「なんだか とっても うれしいきもちに」なります。うさぎ、さる、くまにもあげると、それぞれにお礼の品を持ってやってきます。きつねは、「ますます うれしい きもちに」なります。「もっと みんなに あげたほうがいい」と考えたきつねは、「ぶどうや」になることを思いつきます。他の動物もまねをし、森にはうさぎのいちごや、さるのバナナや、くまのさかなやが並ぶこととなります。「きつねは ぶどうをあげるかわりに にわとりに おまんじゅうをもらった。くまは ひつじに さかなをあげて セーターをもらった。」みんな市場へやって来ます。「だから いちばは どんどん おおきくなる。」のです。

きつねからたぬきへ、たぬきからきつねへには、化かし合いも騙し合いもありません。それがないことを示すためにこそ、きつねとたぬきを登場させたとも言えます。もし騙し合いを入れれば、「もりにいちばができる」プロセスは複雑極まりないものになるに違いありません。「ぶどうや」になったきつね、「や(屋)」になればそれまでのように「うれしいきもち」だけでは済まなくなることも確実です。そう進む、そうは進まない、双方を確認しながら読むこともこの本の楽しさかもしれません。

(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館